令和6年度 第2回 南地区学校運営協議会 グループ協議の内容

令和6年 10 月2日 実施

〈A グループ〉

○ 図書室開放事業について
- 周知の仕方に工夫が必要
- 「学習もできる」とすれば、来校者がまだあったかも
- 事業の目的をどこに設けるかが大切

○ 学習支援ボランティアについて
- 授業者にとっては有益な事業
- ボランティアにかける「ボランティア保険」は必要（何かがあってからでは遅い）
- 交通費などの手当をきちんと保証すべき（無償ボランティアは今の時代に即さない）

○ 不登校への地域社会の関与について
- 児童に少年団に参加してもらえたらよいのだが
- 実情が一人一人異なるので、専門の対応をする人が必要
- 外とのつながりづくり
  - ⇒ ゲームでもよい、好きなことから
  - ⇒ 本人や保護者が外とのつながりを求めてくれるなら、それに応えることはできる

〈B グループ〉

○ 図書室開放事業について
- 一定の成果はあった
- 来校者が少なかったのは、場のイメージができなかったからでは？
- 成果は発信し、今後に向けてはニーズに合わせることが必要

○ 学習支援ボランティアについて
- 効果あり
- 協力をいただいていることを発信し、保護者・地域住民が関与しやすい開かれた学校づくりを進めること

○ 不登校への地域社会の関与について
- 引き続きスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーによる保護者や児童へのフォローが重要
- 地域の中で居場所があればよい
- 地域社会にも現状を伝え、「現在の不登校への基本的対応」に関して理解を得る

〈C グループ〉

○ 図書室開放事業について
- 学習の場とはなり得る
- 他の学校の児童や幼児の扱いについて統一が必要

○ 不登校への地域社会の関与について
- 勉強に自信がないのでは
- 昼夜逆転などで適切な睡眠が取れていないことも要因となっているのでは
- 不登校の実情については、学校内でも地域社会内でも、話せる（触れることができる）環境としなければ
- 学校でも地域社会でも、本人にとってよい「きっかけ」となるような場をつくることができれば